告知板

■日本協同体協会
▽共同性発見集団の会合が、月一～二回のペースでおこなわれている。
▽来訪者は午後3～6時ごろ来てもらうのが一番確実。
※東京都渋谷区代々木4―5―14　参宮橋ハイツ10　電三七〇―二八一三

■コミュン好き者会
▽旧「月刊キブツ関西読者会」月一度の定例会（通常、第四日曜日に大阪守口市の守口市民会館で）、備北共同体の建設、『コミュン往来』の発行などの活動をしている。
※尼崎市水堂榎木二〇　榎木荘内　今井みさを方

■名古屋読者会
▽毎月第三月曜日午後7時～9時、FIWC東海委員会事務所（新住所―昭和区丸屋町4―32―6川村荘内三浦気付　電八五一―三八七五）で例会をもつ。
※名古屋市守山区小幡太田88　小幡団地58―三〇一　梶原方　電七九三―七一三七

■仙台読考会
▽月一度のペースで、キブツ、人民公社、共同体などについて話し合っています。
※仙台市三百人町一五七松泉堂アパートA　大原輝一郎気付

■広島読者会
▽毎月第四土曜日五時から会合を持ち、備北共同体と密接に結びついてゆく予定。
※広島市青崎一―一―十四池田敏雄気付　電八二―七七五〇

■府中読者会
▽「土が欲しいもぐらの会」の研究会の延長として、毎月第二第四土曜の夜、共同生活の場で会合をもっている。
※東京都府中市四谷3―55―20　ぐるうぷ・もぐら　電〇四二三―六四―一七二四

■九州読者会
▽不定期に会合。
※福岡県三潴郡三潴町玉満二六三五の一　広松伸子気付　電〇九四二六―四―二一二五

■一燈園
▽智徳研修会―毎月七日～十日におこない、実践研修を通して無所有奉仕の精神を学ぶ。会費は三千円と米一・五キロ。
※京都市東山区山科四の宮　光泉林　電五八一―三一三六

■山岸会
▽特別講習研鑽会―三重県の本部では毎月1日、15日、北海道の別海町では毎月21日から各一週間。費用は七千円。
※三重県阿山郡伊賀町春日　山岸会本部／東京都新宿区戸塚三―一一三　ヤマギシズム東京案内所　電三六八―四六五〇

■みみずの会
▽毎月第四土曜日の午後六時半から新宿区立赤城社会教育会館で、「労働と人間関係」について考え合う。
※電　東京二五五―六八七一東洋シュランク　北邦彦まで。

■FIWC東海委員会
▽月二回金曜日に共同体研究会を、月二回土曜日に精薄問題研究会をしている。
※名古屋市昭和区丸屋町4―32―6川村荘内　三浦気付　電八五一―三八七五

■安保拒否百人委員会
▽三里塚、横田などでの活動を続けている。
※川崎市西三田団地七―六―五〇一河辺気付

■釜ヶ崎救援会
▽不当に弾圧されている釜ヶ崎労働者を権力の手から守るために支援を歓迎。
※大阪市北区浪花町一二五　関西救援連絡センター内

スポット・2

揺らぐわたしたち

▽人生の定礎
▽生活のなかより
▽軌跡としての
　我が自己変革
▽不安の超克へ

わたしの内側をみつめると
めまいがする。
大自然も
社会も
戦争も
いうなら、そのままの大きさで
わたしの中にある
このわたしを
どうしよう……

人生の定礎

笹原　仁太郎

筆者の紹介のため『実践一燈園生活倫理』から「緒言」全文をそのまま借用する。

現在私の実生活を顧みて見ますと、誠に愉快な有難い日の連続でありますが、試みに目を一般社会に転じまして、そこに現われて居る常識と比較致しますと、全く不可思議な現象だとも見られるのであります。

この事実を具体的に話してみますと、

一、純無所有であり乍ら、金や物が無くて困ると云うことが無い。
二、就職についての一切の用意を持たずにいて、仕事が無くて困ると云うことが無い。
三、純無所有であり乍ら、前途に不安を抱くことが無い。

今かように息づいている私を、一般社会の人々は一燈園同人と云うことに決めてしまいました。云いかえますと私の息づきが一燈園生活であると云われていることになるのでありますが、実の処一燈園生活とは如何なるものであるのか、その厳密な意味は私には解らないのであります。従って私自身「私は一燈園同人です」と云った覚えも無く、又その資格も無いのです。然し少なくとも前に記した三ヶ条は、実践によって証明され、現に私はその実践のうちに居ります。

今から五十五年前に、西田天香さんが一人で始められた生活が、今は五百名の者がいのちがけでその後についています。この生活の行じられている場を、一般社会の人々は一燈園と称し、自分等の生活の場と、はっきり一線を割しています。

この生活の場に、その次代を継ぐ者の教育という現象の現われるのは、当然のことであります。この当然現わる可くして現われた教育の場に対して日本政府は、国法に準拠する学校として全きものであると認め、一燈園小学校、一燈園中学校、一燈園高等学校と云う三つの学校が出来ました。

而してその高等学校には、三年制の専攻科が付設され、教養課程による大学教育を実施し、一燈園大学林と称しています。

奇しき私の因縁は、これ等諸学校の校長と云うことになって十五年を経て来ました。全く不可思議と云う言葉以外、ここに用ゆる言葉は御座いません。

勿論私がかかる学校の教員を志願する理も無く、又志願して出来る事ではありません。元来学校教員になろうと思った事が無いからその準備の為の時間は一刻も持たなかったのは前記の通り、その私が事もあろうに一燈園の諸学校の校長の地位を穢して十五年、一般社会の常識からみれば、言語に絶した厚かましさであります。然るに私自身厚かましいとは、露程も感じて居ないから益々不思議です。

それは今ある私の息づきの由来について、私自身何等の責任を持っていないからであります。否持とうとしても持つことは出来ないのであります。唯出来ることは、この今を精一ぱい私の全力を挙げて息づくことだけなのであります。その結果のよしあしは、仮に私が責任を持って見てもどうすることも出来ないのです。

こうした私が、今度生活報告を書かねばならぬ羽目になったのであります。これに対して相応しいものになるかどうか解りませんが、私が日々一燈園諸学校で講じている倫理の講義をそのまま記すことによって、課せられた責を果たしたいと思うのであります。

仮に前後の二篇に分け章を整えましたが、一燈園小学校から大学林に到る各学齢に応じて、適当なる言葉を用いて講ずるのは勿論であります。

この論理の草稿が皆様の為にお役に立つやら立たぬやら、勿論私の関知する処ではありません。唯私の不徳と未熟が、縁あって読んで下さった方々に障りを作りました節は、どうか許して下さい。そして万一この私の学校教師生活の報告が、一燈園生活を通して現われた教育の全貌を伝え、人類真生活の為に、少しでもお役にたてていただけるようなことにでもなれば幸甚であります。

人生の定礎

今ここに自分は息づいている。
一息々々この息づきだけが、最も確かな事実である。
この確かな事実を基礎にして立った人生は強く、この事実を一足でも飛び越えた処に基礎を置いた人生は、実に弱いものである。
今がよいからでなく、死守する今が無上となる。
ここがよいのでなく、死守するここが無上となる。
自分がよいのでなく、死守する自分が無上となる。
それは、
今をおいて次の時は永遠に来らず、

ここをおいて別の所は絶対になく、
自分をおいて他の生命は息づかない、
からである。

時と所の生命を失って、そこに尚有るように見えるのは、全て虚像であるのは勿論である。

人間は常に「虚」の上に安住しようとして苦悩している。これは本来の姿でないことは勿論であるが「真」を失った結果、自然「虚」の世界に沈まぬを得ないのである。

即ち
今を忘れて次を思い、
ここを忘れてよそを見、
自分を忘れて他人を責め
た結果、虚の世界に落ち込んだのである。

かくて今や、地上は虚の世界であると託たれるけれ共、それは地上そのものが虚の世界であるのではなく、そこに住む人の息づきが虚りであるだけである。

一人でも真実の世界は、作ることが出来る。それは一人の地上は、一人で足りるからである。

されば人間は何を憂うる必要もない。
今を大切にし、
ここを大切にし、
自分を大切にし
てゆけばよいのである。真実の世界は今、ここに、自分一人でうちたてることが出来、而してこの他に道はないのである。

人類の歴史あって以来、真実の世界を打ち立てようとする努力が、数多くの人によってなされてきた。而して現にある地上の姿は、それ等多くの人々の努力の集積である。この上より真実のものとしようとする努力が、現在もなお多くの人によって払われているのは勿論である。その人達のうち一人に西田天香と云う人があった。

西田天香と云う人が「今」「ここで」「自分」を独り凝視めて、それが極めて厳粛に息づかれてあった為に、見事な西田天香の息づきが具現して来たのである。

この息づきを仮に「一燈園生活」と名づけて、五十五年間（昭和三十二年現在）続いて来たのである。

この五十五年間に、一燈園生活がどれだけ人間の生活に大きな影響を与えたか、それは勿論人間の力で計り知ることは出来ない。

奇しき因縁によって、燈影学園に入学した皆さん方が受けている、この生活の影響はどんなものであるか、皆さんには解らないのである。同時にそれは、何人にも解らない問題でもある。

皆さんは、何故一燈園生活という生活に息づくことになったか、と云うことを詮索する必要は更にない。而して、一燈園生活に息づいていることに就いて、感謝しなければならぬと云う義務もなければ、感謝し得る権利もない。あなた方は全く純粋に、あなた方である。今あるがままのあなた方である以外の何ものでもない。この厳粛なる事実以外のことを考えてはならぬのである。かくて皆さんは

一、一燈園生活者である。一、光泉林の同人である。
一、燈影学園の生徒である。

と云うことが、丁度皆さんの性別の決定されたように、一燈園生活者として光泉林に生れ、燈影学園に学ぶ学生と云う、厳然たる事実の上に息づいている。（『実践一燈園生活倫理』第一章より転載）

真の生活をここに

木村　糸子

〈革命か一燈園生活か〉といわれた此の生活を親は子供に残せる唯一の遺産、財産だという。自分の身命財を捧げてしまった両親から何も貰える物はないはずであるが、人間の本当の生き方として子供にこんな生活もあるのだと云える事、そして一緒に生活した事実である。いつまでも此の生活を続けることを希んでいる。

天香さんが亡くなられた後の光泉林は行事を追いかけ維持するのに追われている。生産部門が大きくなればそれだけ一燈園生活は薄らぐ。家族ぐるみで一燈園生活をする証として光泉林が開かれ、だんだん大きくなり知られ、事業面が拡がりそれに振り回されている。勿論出発点は全て道の上から始まっているのであるから、自分が執われずにいればよいのであるが、現象面を見た場合一燈園生活とはこんなものなのかと疑問が出てくる。全ての生活を光泉林で送り、教育を受け、頭ばかり大きく観念的になり、そこで一燈園を知り、人間の弱さを認めずに完全を求める。

天香さんが亡くなられ緊張が緩み、人間本来の姿に戻り、所有欲や権力欲が次第に自分の心の中に宿り、自分では気がつかずに言葉とは逆に行為として自然に身についてしまう。天香さんに親しく触れる機会が私にはあまりなかったが、居られる時は、澄んだ冷たく感じるような空気が漂い、今は生温い空気の中に保護されている。毎日の生活は、七時過ぎに起きて仕事は八時過ぎから五時までで、お昼は一時間休み、五時以後は自由である。昔は月に二回の聖養日だったが、今は研修会にかからない限り日曜日毎に休みがあり、お金や食物の心配なしに毎日が繰り返されている。給料こそ貰っていないが気持としては単なる労働とかわりない。テレビ、冷蔵庫、掃除機、ストーブ等が揃い快適な暮しで酒もタバコも普及（？）している。これらの物によって生活が潤い楽しくなっている。自分自身も素直に納得出来ずに、そして、なければ不便を感じながら利用している。これは生活が定着した事、二世の時代になり一燈園生活の精神が薄れ、上辺だけの、時代に遅れまいとする気持の現われの証拠である。光泉林の中は一応皆の生活が同じであることがせめてもの救いである。が、反面そこには自分の事や、自分の社会の事だけしか考えられない危険性が見えている。天香さんも物自体に対しては決して否定されてはいなかった。しかし物事に対する執着心にはきびしかった。亡くなられる一年前の年頭に「このままでは潰れる」という一言を長い時間かかって云われた時の事が印象に残っている。光泉林と一燈園生活は一体であって決して別のものではなかったが、今は一燈園の精神があり、光泉林の生活がある。単なる利益社会的な共同体として、一燈園精神を潤滑油とした光泉林は残ると思うが、それでは自分にとって淋しい気がする。他人によくして貰うのではなくて結局自分が本当のものを見い出す事が必要で、その為には一燈園生活を自覚実践しなくては光泉林は自分の満足出来る社会にはならない。

父は家業のゴタ〳〵した問題から入園し、母は夫である父に付いて来ただけであるが、兎に角父と共に一燈園を選んだ。私にはそういう切羽詰った選択する時期が今まで訪れなくて、根本的に生活に対する心構えが違っている。一燈園生活の重要さや、無我、無心、無所有、世界平和などと教えられるその言葉を信頼しおだてられていた。仏つくって、魂入れずと云われるのと同じである。

自分から一燈園の枠をつくり殻の中へ納まろうとしてもがいている状態なのか解らないが、そのようなつもりは決してなく、まして堕落しつつある現実を前にして、それにはどこかに無理があり最高のものではないようにも思う。富者の万燈よりも貧者の一燈と云われるように、社会への影響力は弱く、消極的な受身の生活でそれが何とも頼りない。過激な学生運動の暴力行為、色々なデモやストライキに対してうらやましい情熱を感じ衝動にかられる事がしばしばある。がやはり自分には出来ない。純粋さ故に起る学生の行為、そして又人間の生きる為の手段として行なわれるデモやストライキ。権利を主張する事ばかりで同じ事を何度も何度も繰り返して根本的な解決を見たことがなく、無意味ばかりでなく、そこに生まれる人間関係を思うだけで自分にはとっても出来ない。逃げるのでもなく、利己主義で自分をいつわっているのでもない。友達がよく職場に於ける不満や実状を話し、女が一人生きていく為の苦労を話す時「私は全ての人間を信じ、悪い人は一人も居ないし、又馳される方がいい」と云えば友達は「甘い、世間を知らない」等と云う。〈女が一人で生きる〉という言葉に疑問を感じるが、暮らしていく上での恐さや、危険性に対しては心配していないが、感情のゆとりが失われていく危険性が一番恐い。今までの生活にはその様な経験はしなくてもよかった。何故暴力やスト、デモをしなければ解決出来ないのか実感として解らない。一燈園は生活の為に働かず、無報酬の捨身の生活である。光泉林では一世の捨身の生活が、我々二世、三世の者にまで続いていた為に、ある意味では押えられてその場所、機会がなかったとも云える。今自分は、社会機構や人間をじかに知り、物事に対処する一燈園の生活法を見直してみたいと思う。

数年前山科に生コン工場が建設されるという時、地元の人々は色々な方法を以て反対した。その時一燈園は街頭清掃を毎朝何人かの人達が行う事で反対に協力した。結局工場は建たなかったが、この行為が果して反対に協力していた事になるのか今尚解らない。大きな力の前にどうしても小さい弱さを感じるが、日常生活の中から闘争を避ける心を、自分自身の内容から創り出していく必要を感じる。争いや問題を起こす人間の心持は、いつの時代でも同じで自己主張によるものがほとんどである。それに対して天香さんは自己否定、捨身の生活をされた。種々の現象の前に、自分がどうすればよいか迷っている私のダラダラ生活から脱するには、身近な一燈園生活を足場にするのが一番近道のようである。一人の人間として、女性として全てに大きな欲望を持ち、そこに生まれる現象から、自己否定の必要性を実感し、認め、確証を求めなければならない。いままで自分を支配していた〈させられている〉のではない事を自覚して身近な自分の生活の中から整理を始めなければならない。（一燈園在住）

軌跡としての我が自己変革

岩尾　史生

序

人間の体験は、常にその人の心の中にあって、その人自身の思想を生み出すエネルギーを帯びている。酵母による発酵は短時間内に作用するが、人の原体験が発酵し、その意味を充分に展開しうるまでには五年も十年もの年月を必要とするにちがいない。

したがって、以下の小文は、学園闘争体験派による一つの「自己変革をめぐっての断片的で中途半端な体験的叙述」にすぎない。

I

しばしば指摘されるように、68・69年の全国学園闘争のもたらした思想的意味の重要なもののひとつとして、自己変革・自己否定の視点及び志向がある。もとより、自己変革とは自己を対象化することから生まれる思想的実践的態度である。それゆえ、自己を体制の被害者として措定し、批判し否定すべき対象をおのれの外にのみ求めている限り、自己を変革しようとする姿勢は出てこない。

だが、新左翼の労働運動が、おれたちのしている仕事は、いったい何か！という反省から出発したように、かの東大闘争は、エスタブリッシュメントとしての東京大学の原理的否定を、そのなかで生活している研究者や学生としての自己の存在性そのものの否定をバネにして追求していったのである。

その意味において、東大闘争をひとつの頂点とする全国学園闘争は、〈被害者性〉に依拠して展開された戦後の伝統的な運動のパターンと、そこに内在する〈前衛主義〉〈啓蒙主義〉とを否定し、日々の生活と実践との結合を運動そのものの構造として定着させようという意識をもって、各自が自己変革の志向をおのれに突きつけていくことを大衆的に提起した、といえるだろう。

だが、理念はともかく、現実の事例の多くは、この自己変革・自己否定が実は無意味な空白の中にひたすら侵攻していったことを示しているようだ。

自己変革とともに叫ばれた、〈日常性の否定〉ということが、日常性そのものの否定とか、暮らしの秩序としての日常性の一切を否定しようとするものではなく、矛盾に満ちた現在の日常性を否定することにより、矛盾のない（より少ない、といった方がいいだろう）新たな日常性を創造することであった。それにもかかわらず、それが罪のない勘違いや誤れる潔癖主義のなかで、現実への傲慢な居直りを生み出したり、不毛な形で自己を追いつめていくことだけに終始してしまった。その事情と酷似したことが、自己変革の場合にも同様な形で起こったように思われるのである。

そういったいきさつについて、少し体験的に語ってみたい。（私事にわたるが、具体例は出来るだけ具体的事実に即するにこしたことはないだろう。）

II

筑波移転反対に端を発し、〈研究学園都市粉砕・新たな大学秩序の創造〉を目指して闘われた二五〇日におよぶバリケードストライキが、機動隊の導入によって解除された。その後は逆に、大学当局の手によるロックアウトが七ヶ月以上にもわたってしかれ、あらゆる闘いが徹底的に圧殺されていった。そして、《正常化》の名の下に〈一年四ヶ月ぶりの授業〉が検門体制下で実施された時、櫛の歯をひくように多くの学友があらゆる問いかけを捨ててキャンパスに身を投じていった。

学園における自己の存在・位置をも含めて、制度、機構をはじめ、既存の一切の意味を懐疑し、告発し、大学とは？学問とは？　とラディカルに問うたまさにそのもののなかに、おのれ自身をさげすむこととひきかえに全てを不問に付して、嫌悪してやまない旧秩序のなかに回帰していったのである。ふっ切れなかった日常性を憎悪し、変革しきれていなかった自己の弱さに絶望しながら……。

そして、僕自身も「筑波との取り組みなくして、卒論と取り組むことができるか――否。就職と取り組むことができるか――否。」という確認を自ら反古にし、ともかくも卒論を書き、いちおう教員採用試験を受けてみたのである。

むろん意識のうえでは非常な葛藤があったし、その後の自分の身のふり方はじっくり考えていくつもりではあった。だが、当時の状況は何ら展望も方向性もなかった故に、無為に学生であり続けても全く不毛なことは解っていたし、かといって退学にも踏み切れない以上、すでに先は見えていたわけである。自己の存在そのものを問題にはしたが、階級を選び直そうとすることはできなかったから。

はたして二ヶ月後には、「教師になるためには（教職は入学以前から将来の道として確定していた）卒業することが必要なのだ。卒業するためには……」と自己を合理化しつつ状況のなかに屈服していくことになった。卒業を前にして、様々な想いが僕の胸のなかに去来した。その時、状況に屈服しおのれを曲げざるをえなかった自分に対する否定的把握から、自虐的なまでに自己変革への志向が誘起された。それ以前観念的に口にしていた自己変革・自己否定ということが、まさに現実の切実なものとして身に迫ってきたのである。

そして、教職に就くに先立って、「教育者になるとは、教育者たらんと決意することは、自己の対象＝生徒を変えようとする意志をもつことであり、変えるとは自分が変わることによって相手を変えていこうとする営為である。」という教育観を今後の指針とし、教育実践のなかで、生徒に自己変革を迫ろうとすることをテコにして自分自身を逆に追いこみ、おのれの自己変革を果していくという方向性を自分の道として設定したのである。

III

かくして、高校の一社会科教師としての新らしい生活が開始された。

ところが、一教科の担任として眼前に四十数名の生徒を前に、黒板を背にして立ったとき、そこではじめて〈自己変革の何たるか〉が自分の前に具体的にあらわれ出ていることをみた。

それでは、それ以前における自己変革とはいったい何だったのか、ということが疑問として湧いてくる。この当然の自問（驚きにみ

ちた、痛切なそれだったが）の結果、〈自分にとっての自己変革の実像〉とでも表現しうるような事実が明らかになってきた。

あれほど頻繁に又真剣に自分に課してきた自己変革ということが、実は一般的な自己の弱さの克服程度のものでしかなく、何から何への変革なのかがほとんど意識化されなかったこと――自己変革の実像――が明らかになったのである。自己のいかなる面を否定し、それをいかなるものへと変革していくかが、全くばく然としていて、せいぜい〈プチブル性を打破してプロレタリア意識を所有する〉といった次元の観念的なことでしかなかったことなのである。たとえば、「仮に、自分が一人のベトナム人の前に立った場合、いかに自分が人類の平等を叫んだとて、所詮それは空しい。現実には、自分を抑圧者にし相手のベトナム人を被抑圧者としてしまうような機構が両者の間に介在している以上、このどうにもならぬ事実に対して自分はどうすればいいのか……。自分はそういった自己の存在矛盾を自己の負い目として自覚し、それをバネにして自己を変革していく以外にない。」というような。

だが、そういった「仮に……」などという現実との具体的な接点のない観念的なことではなく、教師として授業の中で具体的に生徒とかかわり合う現実のなかでは、ぬきさしならない形で問題にぶつからざるをえないのだ。そして、そこでは自己変革のナカミも明確化されてくる。自然に、又必然的に。

具体的に言おう。「本来、教師にとって生徒は教育の相手であり、授業のなかでは教師も生徒も共に対等な人格として両者が教育の相互主体化となる。」とか「教師の役割は、生徒が持っているその可能性とその創造性を充分に豊かに引き出すことであり、生徒が積極的に物を見、物を考えるための素材を提供することである。」といった僕の教育理念は、「教師が教育の主体であり、生徒が教育の客体であるという、教える者と教えられる者との一方的で固定的な教師と生徒との存在のありよう」に慣らされてしまっている現実の多くの生徒に、すぐに通じる訳がなかった。それ以前の十年にわたる学校教育体験のなかで「勉強なんて面白いはずがない。授業なんてみな同じだ。勉強をしたり授業を受けたりするのは、単位をもらい卒業するための強制労働でしかない」と割り切ってしまっている劣等生。自分の頭で考えようとせず、自分の心で感じとろうともしないで「教科書を何度も読み、教師の説明をよく聞いて、それらをより多く、より正確に覚えこむことが、勉強をすることであり授業を受けることだ」と信じ切って疑わない優等生。どちらも学ぶことにおける自主性・主体性を喪失してしまっている点ではひとつである。そういう生徒が多数をしめるなかで、本来教えようもないことである〈人間の生き方、あり方について原理的に主体的に考えていこうとする倫理社会〉の授業を（僕は教科の目標をこう理解しているのだが）どう進めていったらいいのか……。大きな厚い壁の前に立ちすくみ途方に暮れる想いであった。

しかし、今日も明日も授業があり、教壇に立たなければならない。だが生徒の自主性、自発性に委ねていては何も始まらないのだ。「何もしないことも、ひとつの教育である。」なんて思いつつも、新米の教師にそんなことができるわけもない。まず生徒の自主性、自発性を喚起することが第一だが、とにかく教師として何でもいいから授業の形を整え（！）なければならない、と思ってしまう。何をどう教えたらいいのか……。

もはやそこでは、生徒不在のまま授業が構

想され、教師としての自分に与えられた時間的空間的空白を表面的にでも埋めていこう、無難にこなしていこう、ということになりかねない。

そういう状況のなかでは、生徒の主体性はもとより、教師としてのおのれの主体性そのものが危機にさらされる。否定的に把えざるをえない教科書のなかにどっぷりつかり、生徒の存在を意識下に追いやり、ただ五〇分間しゃべり続けていれば、それはそれですむし、それが一番楽であることははっきりしているから、時折そういった誘惑が自分をおそうからである。なにも安い給料で、やる気のない生徒を相手にして……などという悪魔的な言葉が響いてくることもある。

だから、教師になった僕にとっての最初の自己変革とは、こういった誘惑＝頽廃の道に陥りそうな自分との闘いという、全く卑劣でカッコ悪いものだった。（もともと、現実はすべてカッコ悪いものであり、自己変革という行為自体も大抵の場合は、そんな仰々しい言葉を使うのが恥づかしくなるほどカッコ悪いものなのだろうが。）

Ⅳ

しかし、教師を頽廃へと誘いこむ道は多様であり、教師を歪んだ教育体制の有能な維持者として引き入れようとする陥し穴はあちこちに大きな口をあけている。

よく、教師は二つの顔を持っている、といわれる。

僕が思うに、その二つの顔とは、対等な人格をもつ生徒に対する教育者・指導者としての人間的な顔と無思慮、無分別で未熟な（！）生徒に対して権威をもって臨む保護者・管理者としての権力的な顔とであろう。（もちろん一人の教師のなかで両者は渾然一体として現実には区分しにくいが）その後者の顔に対する無自覚あるいは全的肯定を出発点として、教師は体制のなかにのめりこんでいくのだろう。そして、その時から、教師は生徒に対する支配者、抑圧者・加害者におのれを転化していく。教師を体制内化させるのは極めて簡単なことで、それには教師を小権力者として仕立てあげさえすればいい、といわれる所以である。

それ故、自己変革の中身を一面的に固定化したうえで、「せめてこれ位のことはしよう、少なくともこれだけはすまい、そういう教師になりきれる自分に作り変えていこう」なんてことでは決定的に不十分だと思う。大切なことは、何にむけて何を否定し、何を生みだそうとする自己変革なのかをはっきりさせ、そのための基本的視点や姿勢を確立することだ。

「何故、タバコをすってはいけないのか」を論理的に説得するのではなく、未成年の喫煙は法律で禁じられているからという理由だけで、警察的に生徒を一方的処分に付する。もちろん、生徒指導・教育的処分の名の下に。又、歪んだ競争原理によって貫かれている差別と選別の教育体制のなかでは、むしろ必然的に発生せざるをえない生徒のカンニング行為を、許せざる個人的な不正行為としてのみ捉え、他者へのミセシメをこめて厳罰に処する。こういった考え方、やり方が全体としては当たり前の如く進行していくなかで、少数反対派としての自分も又その責任の一端を荷っているのだという教師としてのおのれの痛みが、だんだんマヒしてくることを時として感じる。

だからこそ、生徒に対して権力的な顔をも

つ自分を、あらゆる場で常に徹底的に否定していかねばならないと思うのである。教師としての自己変革の視点を、まずこの点に求めなければならないと思うのである。

V

以上、体験的につづってきたが、まだまだ書き足らないにもかかわらず、まとまりがつかなくなってしまったようだ。きっと、自己変革について充分に論理化しうるほど内的に整理されていないからだろう。そこで、今考えていることを述べて結びとしたい。

現代の社会システムにすべての人は荷担している。とすれば、現在の社会体制下において、一人一人の人間は皆な自己矛盾を認めないわけにはいかない。それと全く同じに、現在の教育体制の下で教師として生きていること自体、必然的に教師としての存在矛盾をもたざるをえないのであり、生徒は生徒で又、高校生としての存在矛盾を内包させているのである。

そこで、教師にとって何よりも大切なことは、生徒との関係において、お互いの存在矛盾をあらゆる場所であらゆる機会を通じて相互に告発し告発される関係を創り出していくことによって、互の存在矛盾を最大限に止揚していくことだと思う。そこには、相互変革という方向性をもった自己変革への志向がある。教師として存在している自分にとっての自己変革の虚像（未だ現実の彼方にあって、理念を現実化すべく目指されるもの）をその中で生徒とかかわりながら模索していきたいと思うのである。

過去における自己変革の実像を見定めたうえで（もっとも、現在も又、日々新たなそれを作り出しているのだろうが）模索の中の自己変革の虚像に向けておのれを駆りたて、虚像が生身の自分と重なり合うまで（従って、生き続ける限り永遠に）自分を常に変革し続けていくことを自分の生き方の中心にすえて、毎日を送っていこうと思っている。

自己変革の虚像から実像へ！　などと気負う必要はないだろう。本来、人間が生きるとはそういうことなのだから……。

【追　記】

学園闘争の提起に触発された自己変革への営為が、多くの場合虚名であったにせよ、自己変革のもっている思想的意味の重みはいささかも減じられてはいない。自己変革・自己否定の視点や志向性は、依然として、今後僕等がそれによって〈何か〉を引き出し得る豊かな可能性を内在させている。

そして、この認識こそが、学園闘争を体験し、何らかの関りを持った者に開示された唯一の意味とも言える。

だから……学園闘争を体験したすべての人にこう呼びかけたい。

僕等は、学園闘争における体験を自己変革自己否定の一点に凝縮させて、もう一度その意味を問い返し、捉え直そう。そして、体験をテーマとしてではなく、体験をモチーフとして活かすことによって、すなわち体験について語るのではなく、体験によって語ることを通して、真に体験を伝え合い、他者と共有しながら、体験から学んでいこうと。

僕自身がこの呼びかけに真に応えた時、前記のような主観に満ちた個人的でたどたどしい拙文を越えた、生き生きとした示唆的なメッセージを伝えることが出来るだろう。

（筆者は現在都立高校教諭。）

不安の超克へ（上）

新生命協同体に期待する

梶原　和義

序

最近の新聞、雑誌の論評には、公害等の問題から始まって、ついに人類滅亡論まで出はじめている。その論調にはいささか先走り、気負いすぎたものが多いが、中には全く否定できないものもある。状勢を客観的に分析してみて思い当る面があり、事が重大な問題だけに、あながち一笑にふしておくわけにはいかない。

人類滅亡論をとなえだした人々は、核戦争の危険、医学の驚異的発展とその乱用、人類の生物的エネルギーの衰退、人口の爆発的増大等の理由をあげているが、私はまず環境汚染の問題をとりあげてこのテーマを考察していきたい。

不安の様相

新聞で連日報道されているように、日本列島の汚染は想像以上にひどくなっている。

陸について言えば、産業廃棄物、工場から排せつされる廃液の浸透の外、直接散布される農薬により年々汚染されている。空気中にある汚染物質も雨や雪にまじって降りそそぎ汚染を早めている。農薬散布をやめた所でも、今後十年にわたって残留農薬が影響を及ぼしていくにちがいない。

海については、直接工場から流される廃液の外、下水、工業用冷却水、船舶からの廃油投棄、産業廃棄物の投棄等、すて場に困るものは何でも海へすてるから、汚染はひどくなる一方である。今後陸上での規制が厳しくなるであろうから、その分だけ海がよごされる危険がある。

空について言えば、自動車の排気ガス、工場群からの排煙により大気汚染がひどくなっている。以前問題となった東京牛込柳町の住民検診では、六十二人の尿中鉛濃度は、都内某印刷工場の労働者四十八人の濃度より高いという、驚くべき結果が出た。（四五、九、二四、『週刊読売』）四日市や川崎市では公害ゼンソクがひどく、多数の公害病患者が出ている。東京、大阪、名古屋では大気汚染物質が複雑に作用し、光化学スモッグが発生した。

このような環境汚染は日本だけの問題ではなく、広く世界的な問題となっている。

汚染物質は世界中へ広がり、北極の氷や南極のペンギンまで、鉛、DDTに汚染されてしまった。汚染物質はあらゆる食物に侵透し、

人体に蓄積されつつある。

世界の海の汚れもひどい。一昨年の五月に葦船ラー二世号で大西洋を横断したハイエルダール氏は、「大西洋はどこまで行ってもプラスチックの容器や廃油のかたまりがぷかぷか浮いていた」と言っている。アメリカの毒ガスも、放射能灰も、ヘドロも、何でも海へすてられていく。石油だけでも年間一千万トンから一千三百万トンも海へ流されてゆくという。

ソ連の科学者アントニーナ・ブヤノフスカは、全世界の自動車一億五千万台が排出したガスは、北半球の海洋の五倍の量に達し、海水の浄化作用がなければ、七年のうちに石油の薄まくが全海洋をおおう。二十世紀末までに海面の放射能は現在の二倍になると発表している。（四五、七、二七、『中日新聞』）

海水中の汚染物質は、魚体内で蓄積、数万倍に濃縮されて、食卓にのぼる危険性があり、その他プランクトンを大量に死滅させたり、海洋生物の種類や分布を変化させる。また海洋に多量の有機物を供給し、酸素を欠乏させ、無機水銀がメチル水銀に化学変化することも考えられ、海が将来新しい有害物質製造工場になる危険性がある。

空の大気の汚れは工場から排出される各種の有毒ガスの外、酸素が減少しつつあるという重大現象が起っている。世界中で石油や石炭が燃焼される結果、毎年六十億トンもの酸素を消耗している。ロスアンゼルスでは、米国の他の都市より大気中の酸素量が、六％も少ないという。東京でも少なくなっていると想像される。

今の所酸素は無尽蔵だと思っているが、やがて酸素が枯渇する時が来るかもしれない。酸素を製造することは不可能に近いから、その時こそ大きな問題となるであろう。

このような公害ラッシュのために、各国の政府や企業は公害対策にのりだしているが、今の所あまりかんばしい成果をあげてはいない。

自動車の排気ガスについては、猛毒の一酸化炭素や四エチル鉛をなくすために、燃焼率を高める等の研究をしている。しかし燃焼率をよくして一酸化炭素や四エチル鉛が減ったとして次に発生するものは、窒素酸化物である。これも新たな公害の原因となる。

すべてのガソリン自動車を廃止して、電気自動車やガスタービン車にきりかえたとする。電気自動車の蓄電池を大量に製造すると鉛ができるし、蓄電池そのものの廃棄も問題となる。又大量の電気を供給するための膨大な発電設備が必要となり、これらの設備から新たな公害が発生する。ガスタービン車のガスをどうして造るかという事も問題となるであろう。

パルプ工場の廃水処理も厄介な問題である。海へ流す汚水の処理のために、大規模な処理施設を作らねばならず、その施設は多量の鉄や電力を消費する。鉄や電力を作る過程で又新たな公害が発生するという悪循環に陥ってしまう。

今までに全世界へ分布した汚染物質を回収することは不可能であろう。もし仮にそれができたとしても、それを無害なものに変換するためには膨大なエネルギーを必要とし、それを得るために新たな汚染が発生する。

それに、世界中に分布している汚染物質を有益なものにかえる方法は、自然にある浄化作用や、生物によるしかないということが、問題を極めて悲観的にしている。

農薬についても難かしい問題が起っている。鳥や比較的弱い昆虫が農薬により絶滅、あるいはそれに近い状態になってようやく農薬禍がさけばれ、禁止されはじめている。ところで農薬を廃止したからといってきれいな野菜ができるであろうか。残留農業の影響がかりにないとしても、問題は簡単にかたずかない。今まで農薬によってきたえられてきた害虫はここだとばかりに大発生し、わがもの顔に食い回るであろう。それに作物自体が病虫害に対して農薬の保護のために全く抵抗力がなくなっている。過保護のまま長年おかれたため、作物自体が自然に対して極めて虚弱となってしまっている。こんな作物をいきなりほうりだしたら、害虫のぜっこうの餌となるほかはないであろう。ある場合には収穫ゼロの品種もでてくるかもしれない。

作物の話をしたついでに述べておきたい。農作物の収穫のゆき先不安をつげるものに、地球の寒冷化現象がある。長い時間から見て、地球は永河期からどんどん遠ざかり、暖化の方へ向かっていた。

五十年～六十年代は温暖化傾向の激しい時代であったが、これには人為的なファクターが作用したと考えられる。温暖化の最大の理由は炭酸ガスの量の増大である。原水爆実験、ジェット機の排出するチリなどが成層圏に集り輻射熱の放散がおさえられた。このため歴史上かつてありえなかった、平均気温が十年で一度上昇するという現象が起きたのである。

この現象は近年急速に変化し、地球がまた寒冷化時代に突入する可能性がでてきた。ここ数年来、世界的に高山地方での氷雪の生成量が増大している。かつて十六世紀の後半に訪れたリトル・アイス・エージ（短期氷河時代）を迎えることになるかもしれない。

地球上空のチリは増大するばかりである。一日に五千機も飛ぶジェット機、それに近い将来定期航路にSSTが就航することになれば、チリはまちがいなく増加する。いままで地球暖化に作用していたチリが、太陽エネルギーの地上到達を弱めて寒冷化に転換することが考えられる。

最近東北各地の冷害が問題になっている。この傾向は単に偶然的に起きているのではなく、地球寒冷化の一環としてみるべきである。もし本格的に寒冷化時代に突入したら過保護化した農産物はとてもたえきれないであろう。北海道や東北ばかりではなく暖地でさえも重大な影響をうけ、現在の過剰米は一ぺんに不足現象をきたすに違いない。人間生活における衣食住の中で、食は第一に重要なものである。作物のことを述べたついでに世界の人口と食糧の関係をのべておきたい。急激に汚染されてゆく地球において特に緊急の課題となりつつある問題だからである。

かつて国連の食糧農業機関（FAO）は地球上の人類のうち八割が飢えていると発表したが、これは主に開発途上にあるアジア、アフリカ、中南米の人口密集地域の住民について述べたものである。今のところ何とか自給のバランスはとれているが、近い将来深刻な食糧不足になることが考えられる。というのは人口増加率が極めて大きいからである。

西暦一五二〇年に世界人口は四億五千万であったが、二六〇年後の一七八〇年には倍の九億となった。その倍の十八億になったのが一九一〇年で、一三〇年間、つまり前の半分の時間しかかからなかった。その次の倍、つまり現在の三十六億は一九七〇年で、六〇年間、これは半分以下の時間で到達してしまった。このペースで行くと、現在の倍である七十二億になる時期は三〇年後の西暦二千年かその少し前となると予想される。もし世界の人口増加率が約二パーセントとするならば二〇〇五年となる。

これだけの人口を養う食糧生産はこの地球上で可能であろうか。まず誰もが考えることは農耕地をふやして増産をはかるということ

であるが、これは特に後進地域に望まれることである。というのは文明地区といわれる先進国では、太陽エネルギーを食糧に交換できる最大限度に近いところまで極端な適性化に成功しているから、これ以上生産量を飛躍的に増大させることは難かしい。面積をふやすことも高地、沼地といった不利な条件のところが残されてきているから、あまり期待できないし、森林を根こそぎにするようなことは治水の面からも酸素の量を確保する面からもすべきではない。

それでは現在使用不能と言われている砂漠やツンドラなどの寒冷地を農地化することは考えられないであろうか。こういう大規模な自然改造は理論的には可能であるが、他へのマイナスの影響が大きくてほとんど期待できない。そのよい例がエジプトのアスワン・ハイダムの建設である。ソ連のあらゆる分野の技術者が集り、十億ドルの外国援助を費してつくられたのに、完成していくつかの欠陥がでてきた。

第一に、蒸発と浸透のために、いつまでたっても水がダムにたまらず、満タンになるまでに二百年もかかるという説もある。結局川下へ流れる水量が減っただけのことである。これだけなら金を捨てただけですむ話であるが、問題はもっと深刻である。上流の肥沃な泥はダム湖でストップし、下流にはきれいな水だけが流れていく。絶妙な自然の均衡であった毎年の氾濫がなくなり、肥沃な泥が流れなくなった。今までこえていた土地が不毛の地に変わろうとしているという。

これだけではない。澄んだ水は川床を堀り下げて橋がえぐりとられ、デルタの海岸線がけずりとられて港が使えなくなり、地中海東部のプランクトンが減って魚が姿を消し、海水の塩分がどんどんふえ、今後どうなるか予測もつかなくなっているという。また、寄生虫の宿主である貝を押し流さなくなったために、農民が寄生虫病にやられはじめた。

地下排水路による塩分除去には敷設費がダム建設費と同額の十億ドルかかり、ほかに年間の維持費が二億ドル、氾濫のかわりの化学肥料費は年間一億ドル以上、橋などの崩壊を防ぐためのダム新設費に二億五千万ドルもかかるという。これなら何のためにダムを造ったのか全く分らない。

日本でも最近地震が頻発しているがその原因はダム建設にあるらしい。地表の張力の平衡が破れ、地殻変動を起しやすくしているためだという。

ソ連ではオビ川やエニセイ川を核爆発によって逆流させるという案が出されているというが、もしそれが実現することになったら北半球の気象に大異変をきたし、それこそとりかえしのつかないことになるであろう。

科学はある一面のみしか研究できない。地質学的にみてもある部分が地球全体に及ぼす影響などとうてい計算できないであろうし、又時間的にみてもせいぜい数十年のデータしかない。これが地球全体の気候とどういう関係にあるかといった所までは考察できない。個の考えのみを考え、全体を考えないというのが現代科学の大きな欠陥である。

問題がだいぶ横道へそれたが食糧問題へもどそう。

近い将来の食糧問題についてだいぶ悲観的にのべたが、食糧増産のために色々と研究が進められている。油酵母による飼料の生産はごく近い将来実用化される見通しであるし、その他直接人間の食料として活用できるクロレラもある。海中にあるプランクトンから食糧をつくる計画もある。現在カナダの小麦生産停止や日本での減反を復活させれば、かなりのおきないになるであろう。

しかしこれらをすべて考慮しても地球の食糧で養える人口は、現在の三倍の約百億人が限度である。その時期は西暦二〇〇〇年から二〇二〇年の間に確実に到来する。つまり人類は一歩一歩絶対絶命の危機に向ってあるいていることはまちがいない。

環境汚染、食糧問題について述べたわけだが、暗い材料はこればかりではない。核戦争の危険、医学の驚異的発展とその乱用、人類の生物的エネルギーの衰退、資源の枯渇、道徳（人倫）の頽廃など枚挙にいとまがないほどの問題がごろごろしている。しかもこれらの問題についてどれ一つ真剣に解決しようという気運のないことが問題をさらに暗くしているといえよう。

このような大きな問題を一時たな上げにして自分の生活を静かに観察してみよう。通勤や通学での外出は少なからず不安が伴っている。交通事故によって一年に一万五千人の死者と百万人の負傷者が出ているが、これがいつ自分の身に起ってくるかもしれないという不安である。こうたびたび飛行機が堕落すると飛行機にもおちおち乗る気になれない。旅行も手ばなしで喜んで行けない。いつも危険をかんじようにしてレジャーをしなければならない有様である。じりじり上っている物価は家計をじわじわと圧迫せざるをえない。最近のように空気も水も汚れ、あらゆる食物に有毒な添加物が入っていると知らされると、いつか自分もスモン病や、イタイイタイ病患者になりはしないか、奇形児が生まれてきやしないかという気持になる。

これとまったく別の、人間関係からくる不安もある。現代のように高密度、専門化、機械化した社会にあって、自分一人がとりのこされはしないかという不安があり、会社が利潤追求をさけぶあまり、人間性を無視し、上役は下役をたえずしかりとばすということになっている所もあるらしい。

人間の不安の最後にあげられるものは死に対するものであろう。一日一日は言ってみれば一歩一歩死に近づいたあゆみである。次の瞬間に心臓が止まるのではないか、神経系統が狂ってしまうのではないかという不安もある。人間が死に向かった存在であるということはまちがいのない事実であり、どれほどあがこうと、結局とどのつまりはそれにつかまってしまうのではないかという不安がある。

人間にとっての不安の最大のものは死に対するものである。これが一瞬間も我々から離れずにつきまとっていて、たえず我々をおびやかし続けている。現代は特に人間を死にあわせるチャンスを多くしている。人間が死ぬということはいつの時代にもあったことであるが、特に現代ではたえず死と同居して生活させられているという所に、特有の様相があると思われる。

不安の原因

前項において不安の様相を大別し、社会的な面と個人的な面について述べてみた。これらの原因を考察してみる必要があると思う。まず地震に対する人間心理の分析からこの問題に立入ってみたい。

最近地震についての不安がしばしば報道されている。ある学者によれば、周期説によって近い将来、関東地方に大地震が起こる可能性があるという。東京都庁は、ロスアンゼルスに起った地震を教訓として、同じような地震が東京に起こった場合の恐ろしさ、地獄絵図、避難方法等をパンフレットにして配付したが、誰も真剣に読まなかったらしい。

一般人に言わしてみれば、こんな紙切れをもらったところで実際に地震が起こった場合

どうしようもない。それよりも今日いかにして金を多くもうけるか、せめて交通事故にでも会わないように注意するというのがせきのやまらしい。

ここに人間の無責任さ、だらしなさがある。都庁はもし本当に地震があるとするならば、それこそ、都市の根本的大改造や、すべてのことに優先してあらゆる意味での対策をこうじなければならないのに、紙切れ一枚でごまかしておく。都民は都民で都市の管理は都庁の責任であり自分たちには関係ないとまったく無関心である。責任の所在をお互いにおしつけあっているが、死ぬのは本人だということが一向に分らないらしい。

いつか地震が起こるという可能性を完全に否定する人はいない。しかしそれが自分の所で起こると確信する人もいない。ここに論理的自己矛盾、不安の原因がある。一方においてある事実を認めていながら、他方においてそれを打消しているからである。もしどちらか一方の考えのみに立脚できるならば不安は起こらないであろう。地震が自分の所で起こると確信するなら、日頃から備えを固くし、起こってもあきらめがつくであろう。地震が全く起こらないと確信するなら、それこそ不安はありえない。

地震の恐ろしさは、予期しない時に発生し、その規模が計り知れないという所にあるのではなく、自己矛盾した人間の思考方式が暴露される所にある。それが人々の前にあらわにされるというだけではなく、それが自分自身にいやというほどみせつけられるからである。

しかもその恐ろしさは人間のあらゆる生活上の立脚点がゆすぶられるという所にある。地上に生活している人間にとって、地は絶対不動のものでなければいけない。又そう思いこもうとし、自ら信じている。しかし人間の生活形態が本当に地についたものであるかというと、そうでもない。動物のように地上に寝起きするのでなく家屋や高層建築物、ハイウエーの上で生活している。地震が起こった場合の被害は建築物の倒壊が大部分である。このいみからいえば地震は人間のみにあって動物にはないとさえいえる。

人間は生物学的には自然の一員であるのに、知性はこれを素直に認めようとせずあえて自然から遊離していった。人工の材料をふんだんに用いた建築物はこの事実を端的に物語っている。だから地震でためされているのは文明そのもののあり方であるといえよう。

公害という問題が大々的に取りあげられてからまだあまり間もないというのに、これがあっという間に世界的な問題となってしまった。これほど大きくとりあげられていながら、今だにその本当の原因が究明されていないのは不思議であり、全くいかんなことである。

例えば車公害について考えてみよう。現在車は誰もが乗っているが、一台一台がまちがいなく公害の原因になっているということも誰でも知っている。だからといって車をやめて電車や地下鉄に切換えるという人はほとんどいない。その原因は公害の加害者と被害者が同一人物であるという所にある。もう一例あげてみよう。我々の家庭にはテレビ、ラジオ、電気冷蔵庫、電気洗濯機、アイロン、トースター等いわゆる生活必需品といわれる電化製品がめじろおしに並んでいる。これを使っていて何らかの疑問を起こす人はいない。しかしこれらの大部分は鉄でできており、鉄をつくるには製鉄所の煤煙をいやがおうでも出さざるをえず、又大量の電気や重油を消費せざるをえない。電気をつくる過程で発電所は公害を発生せざるをえない。このいみからいえば家庭電化製品を使用するためにいやがおうでも公害を発生させざるをえないということ

とになる。

最近の地方選挙での革新市長の旗印は公害絶滅であったが、いざ就任し実行する段になって難関にぶつかった。川崎市はいわくつきの某工場の移転を計っていたが、この工場の関連企業等を含めて従業員は約三十万であった。もし工場を移転するとなれば、これらの大量の従業員をどうするかということで行きづまり、結局工場移転は実現できなかったという。

富士市のヘドロ問題にしても同様である。新聞はそれこそ鬼の首でもとったように連日報道したが、その解決策を何ら提供しなかった。しなかったというよりできなかったというべきかもしれない。新聞紙の多くは富士市で作られているからである。公害に対して、本当に手の汚れていない人はいないという所に問題がある。

私は最近、愛知県警察本部の交通監視センターを訪れた。一室に名古屋市の主要道路を書いた大きなかべがあり、電気回路によって交通量が一目にして分るものであった。係官は得々として信号系統とか、交通渋滞もようが測定できる装置を説明した。これで万事足りたというような様子であった。これを毎朝テレビ、ラジオで放送するというが、これでは一向に解決にはならない。現に私が通勤に乗っているバスは、普通なら十五分か二十分で行ける所を交通渋滞のため一時間はかかる。いくら渋滞程度を放送したところで問題は一向に解決しない。

公害、交通問題に対する国や地方行政府の姿勢はすべてこれである。せいぜい現状を細かく分析し、データーを作るだけで、これで問題を解決したと錯覚している。だから富士市や川崎市、四日市の公害問題はいつまでたっても解決しないのである。

空も陸も水も海もすっかり汚されてしまった。この原因は一体何であろうか。誰がこんなに汚してしまったのか。前にも述べたように、公害発生は文明の利益を製造する過程において必然的に起こってくる現象である。だからつきつめて考えれば、現象主義的科学技術産業を中心とした西洋文明にあるといえよう。西洋文明は現象を分析し、これを創意工夫して物を作り出すことに特長があるからである。

しかし本来の東洋文明はそうではない。生活の便利さを第一と考えず、生命の探求を第一とした。だから文明の利益といったものは生みださなかったが、人生の根源的な意味を探求し、究極的に宇宙と一つになることをめざした。従って見方によれば生活形態はいかにもみすぼらしくみえるが、心は無限の豊かさがあった。車というものが全くなく、ごくわずかの馬車や人力車のみが往来していた長安の都や平安京は、今日の東京や大阪からみて果たして見おとりがするであろうか。私はむしろ長安や平安の都の方がのびのびと自由に暮らせたのではないかと思う。私はそういった都に対してノスタルジアをおぼえざるをえない。

万葉集や古今和歌集にみられるようなういういしさ、おおらかさを現代人は持っていない。万葉時代の生活が今日と比べておとっていたかというと決してそうではなかった。衣食住に関する一通りの道具は工夫され、生活にはことかかなかったらしい。私はかつて北海道登別のアイヌ部落をおとずれたことがある。そこには衣類から、ナイフ、食器、全般にいたるまでの生活道具が木や竹で精巧につくられており、必要と思われるものはほとんど作られていた。

西洋文明によって汚染されていない日本には〈和〉を中心にしたのびのびとした生活が

あった。今日とは比較にならないほどの平和があった。日本へ来た西洋の人々は、日本人の生活があまりにも優雅でおどろいたらしい。マルコ・ポーロは聞き伝えに日本が黄金の国であることを知った。これは物質的な黄金に満ちた国というより、精神の高貴さをいったものだろう。そこでは人々は、人間本来の立場で生きようとするまじめさがあった。この状態は時代おくれというよりむしろ、時代を最もさきどりしたあり方であったと思う。アジアのもっとも東の国である日本は、アジアのふきだまりとして、良いものも悪いものも全部流れつき、そこにみごとな調和交化ができあがった。仏教や儒教は東のはての日本において本当に開花したのである。良いものと悪いものとが見事に融和してここに〈道〉を主体とする日本文化ができ上がった。これは現世から来世へつらぬいて流れる思想である。

道とは、天道、天命ともいうべきもので、これが人間の本当の生きる立場である。自分の立場、自分の思想を、ある場合否定してでも道を立てることが大事とされる思想である。これが花道、茶道、柔道とすべてのものの中心を貫いて流れるものである。切腹という思想はここから出ている。切腹とはいわゆる自分のために死ぬ、自暴自棄で死ぬという自殺行為ばかりではない。主君のために、また道をいかすために侍は腹を切った。千利休は花を生かすために自らを殺したのである。これが日本文化の基本的な流れである。地上の幸福より天の道を尊んだのが日本人の生き方であった。

このような状態に対して明治になって日本へ西洋文明がどっと流れこんだ。人々は電灯のあかり、電話、無線機、西洋医学をみてびっくりした。今までまったく思ったことのないものだったからである。そして我も我もとこれにとびついていった。しかしこれはそれほど驚嘆すべきしろものではなかった。日本文化よりも西洋文化を高く評価しだしたというのは、徳川幕府の圧政があまりにも長く続き、日本人がだいぶひがんでいたからである。幕府を倒すと同時にいままでなかった所へとびつこうとした。これが無条件の西洋文化崇拝となっていったのである。西洋文明をとり入れてからひたすらこれを崇拝し、百年たってみると、そこにとんでもない副産物が現われてきた。一部は予想されたものであったが大半はまったく予想されないものであった。文明の浸透があまりにも徹底していたために今さらあともどりできない位に病状は深いものであった。人生を考えず生活の便利さのみを追い、ほんのちょっぴりそれを味わっただけでもうその底が見えてきてしまったのである。公害から始まるさまざまの問題を根本的に解決しようとするなら西洋文明の本質まで立入って考えなければいけないであろう。これを思いきって切断し、行雲流水を旨とする東洋文化に立ちかえらなければいけない。これが行きづまっている文明を打開する道である。

不安を個人という場から考えてみよう。不安というのは直接自分の身にふりかかってくる種類のものであって、交通事故、病気、天災（地震、台風、火災を筆頭にした）をあげることができよう。近年保険が大はやりで、ありとあらゆる種類の保険がつくられているが、保険に入ってもいっこうに不安はなくならない。保険金をもらうのは他人であって本人を救うことができないからである。

これらの直接目にふれる形の不安に対して精神的な、自分しか味わいえない不安がある。それは何となく心の底からわいてくる不安である。人間の行為はよく注意して本質的に見ると、どんなことをしても一種のうしろめたさを感じ、これが絶対正しいという確証はもてない。これが究極的に死につながっている。死の不安は肉体が滅びるということではなくもっと本質的に魂という命がとられるという不安である。魂というと何か宗教くさいが心を動かしている機能と考えていい。これが取られるというのは、実はもともと自分のものではないからである。魂の機能である理性と良心というすばらしい働きは人間のものではない。人間というより自分のものではないといった方がよいであろう。もしこれが正真正銘自分のものであるなら、何をしても心からの満足と平安があるはずであるが、実際はそうではない。不安は良心によってたえず自分につきつけられる。あれをしてはいけない、これをしてはいけないと四六時中自分を監視し、責めたてる。これは良心が自分のものではないということの何よりの証拠である。たえず不安を感じるというのは、もともと自分のものではないのに自分のものと錯覚し、不法所有、不法占拠していることから起こっている。そしてそれがいつかはとりあげられ、しかも来世という場において裁きというつぐないをさせられるということが心の底で分っているからである。

現世に続いて来世があり、裁きの時があるということは疑う余地のない事実である。もし来世がないとしたら、一体本当の善悪はどこでつけられるのか。裁判の誤審によって無実の罪をきせられ、無期懲役又は死刑にされた人のつぐないはどこでされるのであろうか。大久保清は七人の女性を強姦し殺したがこれと普通人と同様に扱われるのであろうか。戦争や災害で何の罪もなく殺されていった人と、マイホームを楽しんでいる人とが、単なる運命の違いとして片づけられるのだろうか。ヒットラーは六百万人の人間を殺したがそのまま罪のつぐないをしないでもいいといえるのだろうか。もしこの宇宙に本当の真実というものがなければそれでいいだろうし、善ということを全く考えず、強盗、殺人、強姦を思いのままにすればいい。そうしなければそれこそこっけいである。へいへいと頭を下げ、定年までしかられて働くのはまことにこっけいである。世の中の全部の人がそうしないのは、万人がいつか本当に正しかったか悪かったかが明らかにされる時があるであろうと、心の底で信じているからである。

人間の不安は天地の則から見て自分が逆らった生き方をしていることから起こってくる。たえず天地に反逆し続けて生きているという不安であり、その結果、完全な裁きがあるであろうという不安である。従ってもしこの不安をとりのぞこうとするならばまず天地の心を知り、それに従って歩むという以外にはない。そのためにはまずたえず警告を発しつづけている良心と和解しなければならない。良心という糸をたどっていくとき、その良心の出所が見い出され、その心において生きることができる。これのみが、たった一つの人間の心をやすらげる道である。

現代社会が当面している大きな不安、個人生活における不安についてのべてみたが、この両者にかかわるもう一つ大きな、しかも根源的な不安の原因がある。それは現実の世界、宇宙そのものの根本的な問題に関することである。例えば物を例にとってみよう。目の前に花びんなり、灰皿なり、鉛筆なりがある。これらが何の問題もなくただ平然と存在している原因、原理は何かということである。これについては現代の理論物理学者達が必死になって探求しており、これはプラスとマイナスの相互作用、陽子世界と反陽子世界とが互角に作用していることにより存在していると解明している。物理世界を弁証法的にとらえて

も同様のことがいえる。正に対して反が働く時に、この両者が止揚されて、合へ進展していく。正に対して反が生じるのは、矛盾があるということである。矛盾があるから進展、発展がありうる。物とはこの矛盾が物的に露呈したものといえよう。存在するという力と存在しないという力とが、全く互角に作用して、ようやく物が存在している。このどちらかの力が大きくなれば、たちまちのうちに物は消滅してしまうであろう。従って物は安易に存在しているというのではなく、それ自体が猛烈に闘っているから存在しているのである。物の根本的要素である原子は、核の回りを電子が一秒間に三百億回という全く想像もできない速さで回転している。これは猛烈な闘いである。この戦いのゆえに原子どうしが結合し、物体を形づくっている。もし電子が核の回りを回転することをやめたら、たちまちのうちに物は分解してしまうであろう。

宇宙にある二つの力は、一つは物を生かそうとする命の法則であり、もう一つは固定、停止させようとする死の法則である。この全く正反対の法則がこの宇宙にはあり、この両者が猛烈にたたかっている。万物はすべてこのたたかいの証拠として、存在しており、人間もこの両則によって生きている。自分を捨てて宇宙の命に生きようという則と、自分という場にしがみつき、固定、停止しようという則とがある。この宇宙に命の法則と死の法則の二つがあるということは全く厳粛な事実である。人間は必ず死んでしまうにちがいないというが、もし命の法則をつかまえるならば、間違いなく死なない命、永遠に死なない命が与えられるであろう。これは観念でも妄想でもない。確かな事実である。現にこの両者の作用によって万物が存在させられている。見るもの、聞くもの、手でさわれるもののすべてが、この原理によって存在しているということは紛れもない事実だからである。

正の原理と虚の原理が全く互角に存在しており、このどちらかの力が強くなれば物は消滅してしまうとのべたが、それは全く熾烈な闘いを意味しており、そのこと自体が危機を意味している。この宇宙は大平無事に存在しているのではなく、一瞬一瞬危機の状態で存在している。これが見える形、見えない形において人間の直感に伝わってきているのである。宇宙が危機の状態としておかれていることは、このままで完成されたものではないことを示している。このように宇宙の現象面は危機の状態にあるが、他方その底には、絶対盤石、疑うことのできない真実というものがある。結論的に言えば人はこれを理解するために、これと一体となるために、この世に生れたのであり、そのために生かされているのである。

もしこれを正しく了解し、それと一体になるならば、人間の不安は根本から解消され、人間が本当に求めているものの、絶対の平安の境地に達することができるであろう。

それではどうしてこの事実を発見すればよいのであろうか。そのためには前にのべた良心をたぐってゆく以外にない。（つづく）

（31頁よりつづく）

ここキブツにおいても、もっとも女性にとって解放された場所であったはずのキブツにおいてさえ、女性の書記、労働委員など、中心になって未来を設計する部署には女性の進出は数少ない。今後に残された問題である。（つづく）